

No-Dig Today 100号

本誌No-Dig Todayはここに創刊100号に達しましたが、その編集方針は前段と後段で大きく異なります。まず、創刊から41号までは、JSTT事務局に機関誌編集担当者を専属で配置し、その企画案を主要会員の幹部で構成する編集委員会で審議し、編集方針を決定していました。しかしながら、この方式では、担当者個人が収集できる情報には限りがあり、企画案に幅が出ないことに加え、専任者を置く経費がJSTT業務運営に重い負担となることに鑑み、42号以降、非開削技術に関連する主要会員企業から若手実務者(?)を選抜いただき、「編集企画小委員会」を構成。その場での和気藹々とした情報・意見交換を通じ、各号の特集テーマと掲載構成をまとめた企画案を作成、外部有識者を含めた「新生・編集委員会」での審議を経て編集内容を決定しています。

本日の座談会では、小委員会発足当時のメンバーを中心にお集まりいただき、小委員会での本来業務の他、“アフター会（会議後の飲み会）”や“アウトター会（会議とは別の野外活動）”での楽しい思い出話と少しばかりの苦労話などをお聞きしたいと思います。

石川●皆さん、今日は。本日は夫々お忙しい中、お集まり頂きありがとうございます。皆さんにご協力いただいたNo-Dig Todayも、今号で100号となりました。これまでのご尽力に対し、改めて感謝申し上げます。

皆さんに本誌編集企画小委員に当初就任頂いたのは、今からほぼ15年前、今日、久しぶりにお会いする方々もいらっしゃるかもしれません。互いに15年の時の流れをその風貌の変化から察するのではないのでしょうか。本日は、そんな15年の時のギャップを乗り越え、楽しいお話をたくさん頂きたいと思います。

出席者（敬称略）

田中 悦郎

東京ガスエンジニアリングソリューションズ(株)営業技術ソリューション部
(東京ガス(株)パイプライン技術センター 課長：37～51号)

川合 孝

(株)協和エクシオ
(株)協和エクシオ都市土木設計積算G：44～65号)

今川 明

積水化学工業(株)環境・ライフラインカンパニー管路更生事業部 事業部長
(積水化学工業(株)環境・ライフラインカンパニー環境土木システム事業部 係長：No.44～78)

塩見 昌紀

ゼニス羽田(株) 顧問
(日本ゼニスパイプ(株) 開発部長：44～68号)

石川 和秀（進行役）

No-Dig Today 編集委員長

() 内は小委員就任時の所属と担当した機関誌号の期間

さて、皆さんが小委員になられた切掛けは、恐らく、当時の上司から急に「JSTT 機関誌の編集小委員になってこい」と下命されたからではないでしょうか。その時の率直なお気持ちは如何でしたでしょうか。自己紹介とその当時抱いていたJSTTやNo-Dig Today（当時は「非開削技術」）への印象も含めお願いいたします。

田中●東京ガスエンジニアリングソリューションズの田中と申します、東京ガスで開発したガス導管の機器・導管工事非開削工法等の販売・営業を担当しております。

指名を受け、何で私が？何をするの？とマイナス思考が一瞬よぎりましたが、与えられた組織の中でのあてがいぶちだから仕方が無いか、世の中お金を払ってでも異業種交流会に参加する人もいるんだから、せっかくのチャンス、自分なりに何か出来ることがあるだろう、と前向きに捉えての思いから参加した次第でした。

川合●みなさんお久しぶりです。7年前から職場の移動によりJSTTでの活動参加から遠ざかっていましたが、本日このように皆様方に再会できること、たいへん懐かしく、また嬉しく思っています。よろしく願いいたします。

No-Dig Today、創刊100号おめでとうございます。15年ですか、時の過ぎるのは早いんですね。私は、平成15年2月に開催した第1回編集小委員会から参加させていただきました。参加を依頼された時には、雑誌



▲ 石川 和秀 氏

の企画編集などの経験など全く無く不安な気持ちでいっぱいであったことや、これから始まる自身初の経験への期待感、浅田真央風に言えば“フィフティー・フィフティー”であったと思います。

今日は、当時の写真などお持ちしたので、皆様と一緒に思い出に浸りたいと思います。よろしくお願いします。

今川●皆様、御無沙汰しております。積水化学工業の今川でございます。

入社して20数年になりますが、常に「非開削」の領域を歩んできました。その延長線上で現在も管路更生事業に携わっております。JSTTとの関係も当然のことながら「非開削」つながりから始まり、小口径塩ビ推進管の開発及び下水協規格化の業務をしていた頃に遡ります。

委員就任当時を振り返りますと、まだ前の事務所(溜池?)の頃で、日本下水道管渠推進技術協会の条件明示部会のメンバーとして、推進工事技士更新講習会の講師をしていました。同じフロアだったJSTTの方々とも、いつの間にか顔見知りになり、その中で明らかに一番の年若という事もあって皆様に気にかけて頂きました。その頃の業務時間終了後のJSTT事務所には、常に前向きでパワフルな御仁達(後に事務局長される和田氏ら)が、どこからともなく出現し、缶ビール片手に意見交換が繰り広げられ、それに半ば強引に巻き

込まれる感じで、委員になっていたというのが本当のところかと思います。あまり良く覚えていませんが、会社には事後報告で済ませたかも知れません。

塩見●当時、日本ゼニスパイプ(株)で製品開発と事業開発の実務を担当していました。

当社は昭和10年にヒューム管専門メーカーとして創立しましたが、私は入社以来、建設工事の現場監督を10年ほど経験した後、3年間愛知県の工場で生産管理に従事し、そののち新製品の開発部を新設するということで本社管轄に異動していましたので、意外と汎用製品である管材やコンクリート製品についての経験は浅かったわけです。むしろ熱中していたのは落石や雪崩などの衝撃力が作用する構造物や斜面崩壊に関する研究開発でした。15年前に編集小委員に私を指名したのは、入社以来、ずっと私を上げてくださった2代前の社長で大恩人でしたので、「とにかく行っ来てい！」と否応なくという感じでした。しかしながら電力、ガス、通信、ゼネコン、大手資材メーカー、コンサルタント等、多士済々な委員の顔ぶれに気後れし、正直なところ「どうして俺？」と乗り気ではありませんでした。初顔合わせの席で初代小委員長の和田さんから抱負を聞かれ、「抱負も何もないよ～何するのかも知らないんだし」と内心、随分戸惑ったことを今も覚えています。

石川●No-Dig Today編集小委員会を招集させていだいた時、編集委員長としての私から皆さんに、これまでの事務局発想からの誌面作りではなく、小委員一人ひとりが自ら担当する発行号を持ち、自由な発想から、自分好みの誌面作りを楽しんでくださいとお願いしたと思います。私も含め、皆さんも誌面作りや出版事業などには全くズブの素人でしたので、折角のこの機会、大いに楽しんでいただこうと考えたものですが、如何でしたでしょうか。楽しみになりましたか、それともプレッシャーになりましたか。まあ、プレッシャーを感じるような人は会員企業としても推薦しては来ないと思いましたが、…。

川合●石川編集委員長より、編集委員個人に“1号差し上げるので自由に楽しんで取り組んでください”と言われた時には、プレッシャーでは無かったかもしれませんが、戸惑ったのは事実です。実際に、編集小委員会での活動が順次終わり、機関誌として発行されてゆくを見て、改めて雑誌編集の難しさと、ある意味

楽しさを感じることができました。また、編集委員の中には、現在でも大活躍中の編集のプロ奥田さんや、機関誌を発行するLSプランニングさんが小委員会へ参加していることで、安心して作業することができたことも大きいと思います。

そのような中、知識の乏しさを解消してくれたのが、タイムリーに開催される見学会や展示会でした。

見学会において、これまでは何気なく見ていたのに対して、記事や誌面の構成を考えながら、ポイントを見極めることや、現場での工夫や苦労などを目線に置くなど、多くの情報を実際の現場から得られたことは、自身にとってもプラスとなりました。また、逆に知識に乏しい中での視点からみることで、工法や技術のすばらしさや苦労事などを感じ取り編集に活かせたと思います。もちろん、各工法の技術の記事は担当している専門の方に執筆いただくので問題無いですが、実際誌面できちんと整理して伝えられていたかは疑問ですが・・・。

その他として、直接記事を起こすこととしては、各委員による下水道展での見て歩きによる記事ですかね、限られた時間の中、また、数多くの出展から読者の興味を引く話題を見つけるのは、楽しくも有り、プレッシャーでも有りました。

実際には、プレッシャーは有ったと言ったものの、編集小委員会の会議への参加を楽しみと感じながら作業ができた、会の雰囲気にも恵まれていたのだと思っています。最後には、編集小委員長まで任命されてしまいました。

直接編集作業とは関係無いですが、44号からは、機関誌の名称を変えるにあたり、誌面だけでは無く、表紙のデザインも頼まれていました。表題ロゴである



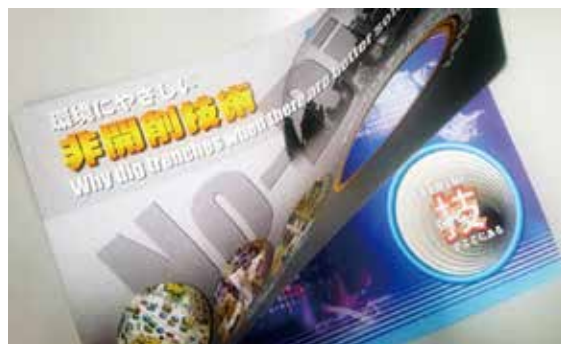
自身のデザインが機関誌の表紙に!!!



▲ 田中 悦郎 氏

“No-Dig Today” は、ライフラインにも様々な事業者や形状があることや、調査・建設・維持管理など幅広い活動を行なっている意味をイメージして作成しました。実際、自身がデザインした表紙が77号まで飾れたことに大満足していた次第です。

蛇足ですが、同時期にパンフレットの作成にも携わっていました。データは保管してあるものの、実物は協会にも在庫が無いことを聞き、少し落胆していましたが、たまたま、先日社内での引越しで机を整理していると、1部見つかりました。このパンフレットですが“道路を掘らない技術がここにある”をキャッチフレーズに、推進工法だけではなく、探査など非開削技術の簡易な紹介ツールとしては良くできていたように思います。このパンフレットは、土木学会のロビーにも置かれていました。



幻のパンフレット？ “道路を掘らない技がここにある”



▲ 川合 孝氏

四ツ谷土木学会本部にて
土木学会資料とともにロビーに置かれた非開削技術パンフレット

今川●私の場合、出席率が極めて悪く、事務局からすると厄介な委員だったと思います。委員会の出欠確認だけでも何度も電話頂いたり、余計な手間をお掛けしてしまって申し訳ありませんでした。そんな状況だったにもかかわらず、出席した際には、色々と勝手な意見を言わせて頂き、委員の皆様と議論を交わしながら、でも良いことは採用される。編集企画小委員会はそのような土壌だったかと思います。

委員の顔ぶれが変わった現在でも、そんな風土は継続していて欲しいなと思います。

塩見●いやあ皆さんの知識とご経験には驚きました。社内で話すことのなかった話題ばかりでした。いい意味で高いレベルの方の話を聞けたり、雰囲気味わえたことは幸いでした。今でもそうですが、自分から編

集の企画を打ち出したり意見を戦わすことは得意ではありませんでした。もっぱら聞き役に徹していたので実の無い小委員で申し訳なかったと思っています。プレッシャーはそれなりに感じていましたが皆さん人柄がいいので、段々ずうずうしくなり、自分なりの形で出席すればいいやと開き直って楽しんでいたというのが実態です。

田中●そーか、楽しむ感覚か、よしひとつ割り切って楽しもう、と思いはしましたが、順番が近付くにつれ自分は果たして出来るんだろうか？とだんだん不安になり自分の担当が終了するまでは楽しむと言う感覚は消え失せ、「ただただ波に乗ろう」のせっぱつまった心境でした。

石川●ある時点から特集テーマの設定を、地中パイプラインのライフサイクルに添った各ステージにおいて有効な最新非開削技術を追って行こうとしました。パイプラインの誕生、すなわち当初の建設、築造から始まり、供用後の探査、検査、診断技術、次に必要な補修、修繕、改築技術、さらには老朽パイプの布設替え、更新技術で次なるライフサイクルへ、という流れです。そうすることで、パイプラインの材質や口径は幾分異なるものの、各事業間での情報交換の場にも使えると思ったのです。また、No-Dig Todayは季刊ですので、年4回の発行、このシリーズを8回で回すクールとすれば、そのジャンルでの2年ごとの技術進展状況も把握できることになります。皆さんが担当されたジャンルでは如何でしたでしょうか。特に印象に残った、あるいは苦勞された特集号はありましたか。

今川●大口径領域の更生工法の特集を担当した時だったでしょうか？

自社の取り扱い工法をアピールする場として利用するのが、企業人としては当然のことだったかもしれませんが、委員の立場としては第3者的な立ち位置であるということを重要視し、あまりに手前味噌のような特集を組んでも意味がないと感じて企画検討に臨んだ記憶があります。

それは他の委員の方々も同じ感覚だったのではないのでしょうか。

出来るだけ最新の技術、最新の工法を紹介するのが使命であり(少々自らの興味も含めて)、興味を持って読んでもらえる技術を紹介すべきだと考えていました。

また、同じ特集テーマでの2順目の時には、前回か

らの技術の進化や事業展開の度合いが分かる内容にしたい！という思いで出稿依頼していました。その時に、社外の大先輩の技術の方から「余程のブレークスルーがない限り1年やそこらでそんなに変わらない。それを狙っているんな事を考えて、地道にやっていくもんだよ……。」とさらっと言われた時に、自分勝手な思い込みのスタンスで接していた事にハッと気付いて、非常に恥ずかしく思いました。現在、事業運営に携わり、開発企画も進める上で、この時の気付きは大切にしている一つです。

塩見●正直なところ、同じようなテーマの繰り返しにならざるを得ないので、どうしようかと小委員の間でも困っていましたが、石川さんの提案で1クール2年の繰り返しで割り切ったことはグッドアイデアだったと思います。技術の進歩も俯瞰できるという点、そして記事の予定が立てやすくなるという点において秀逸な方法でした。私は先ほど申し上げた通り、あまりお役にたたない小委員だったと思いますので、自ら頑張ったという企画物の思い出がありません。それよりも2クール終了時でしたか、これまでの記事をすべてアブストラクトに直して一目で記事の内容がわかるような索引号を作るという時に、貢献度の低かった私に白羽の矢が立ち、全記事を読み直してまとめたことがありました。夏の暑い盛りだったと思いますが、あれは正直きつかったです（笑）。

田中●担当した分野は「地上からの調査・探査・診断技術」でしたが、必ずしも求める技術に至っていない分野でもあるとのことに加え、私自身全くの素人ゆえ、果たしてどう切り出し、どう纏めるか？とただただ不安でした。ですが和田事務局長の助言を受け、今までとは全く違う流れの「インタビュー方式」で各技術の現状・将来の展望等、何とか取り纏められたこと、終わってみて、ほんの少しだけ楽しめたのかな？と安堵した次第でした。

川合●初期の担当は、作業がスムーズに進むよう、各委員が比較的得意としているテーマを与えられたことで、少しホッとしたものです。

当時推進技術は、口径の大小を問わず適用領域を拡大するべく、新工法や材料の開発が盛んに行なわれていたと記憶しています。

初担当した、中大口径推進技術は、1,000mを超えるものや、交角合計が180度以上（つまり元押しなが



▲ 今川 明氏

ら、戻ってくるような角度）など話題が豊富であるため、編集作業においては大変助かりました。逆に漏れてしまう話題もあったと思います。

そこで、特集テーマでは、当時のレコード事例や特殊事例として、1スパンで1,200m以上の二重管推進や呼び径3,500の超大口径、また、2台の掘進機を地中ドッキングした事例などを中心に紹介しました。

特に超大口径管推進は、推進管材料を含め、これまでの推進工法の適用範囲を大きく超える技術として期待されていました。弊社でも専用の掘進機を作成し施工に挑んだことを良く覚えています。また、先ほどお話したように、管材メーカーや施工現場の見学会も開催され、直接見ることで、その大きさに驚嘆し、現地を見ることでの記事作りへの思いが異なってくることを実感しました。



超大口径管推進、実際の推進管を見ると誰しもが驚きます（工場見学にて）



▲ 塩見 昌紀 氏

また、特集の取組みとして、次のクールに向け、1クールごとに、全員で振り返り取組み方を議論していたことも、各小委員への大きなサポートとなったと思います。

その他の担当として、本管の建設から取付管の構築が可能な小型HDD（誘導式水平ドリル）工法と、ハウスコネクションで利用される取付管推進工法について行いました。

非開削技術を用いて下水本管やマンホールなど既設構造物に地中で直接接続する場合には、地下水など土質状況、輻輳する埋設物が存在する中での掘進と接続精度、また接続部の構造形態において高度な技術が必要と考えます。このように接続管工事は規模のわりには、難しい技術を必要としますが、超小口径管路建設



“うんこが流れる”の中を見学 既設構造物でのリニューアル技術の過酷な作業環境を体験。壁面ボロボロですね

技術として紹介する工法で、非インフラ設備構築システムの最もキーとなる技術としてこれからもライフライン建設において大きく貢献する工法を選定できたと考えています。

また、『次世代ライフラインを創造するのは非開削技術でありたい』にも掲げたように、高耐荷力方式、低耐荷力方式、鋼管さや管方式の最先端の掘進技術、それらを支える測量等の付加技術、さらに、最終的な設備として提供される管材における最先端の情報を取り上げるための情報収集には苦勞をしました。

小口径管推進技術の展望として、ライフライン整備事業の環境への配慮のための残土処理問題への取組みや、低耐荷力方式の適用拡大等、未来を創造する事例について紹介したことにより、本記事がその役割を果たす一助となっていたことに期待したいですね。

その他記事としては、中越地震や能登半島地震などにより被災したライフラインの復旧として、損傷を受けた管渠を撤去しながら同時に新設管を設置する改築推進技術の開発普及が盛んにおこなわれていました。一方で、都市部では、新しく作ることより、既設構造物の延命や撤去新設など老朽化した設備のリニューアル技術への取組みも盛んで、本誌の記事にもなりましたが、進むべき方向性などを教えていただき感謝しています。

石川 ●この編集小委員会の場では、普段の日常業務では付き合うことのない、異業種や異分野の方々と自分の業務上の利益とか不利益とかを度外視して、気ままに自由に意見交換や質問をやり取りできたことによって、貴重な情報取得もできたのかも知れませんが、そんな情報やここで得られた人脈が自らの職務に役立ったとか、社内から何らかの評価を得たことがありましたか。社内評価として、JSTTの会議には、決して遊びで行っているのではないと。

塩見 ●初めは渋々だったのに、だんだん楽しそうな顔をして出かけるようになったので、早い時期にバレましたね。社内評価というものは特にありませんでしたが、私がJSTTに出入りする以前に遠山会長と親しくさせていただいていた弊社の会長や社長は次世代への橋渡しができたと安心されたのではないかと今になれば思います。また、ともすれば競合するような会社から来られている委員もおられました。逆に特許でもめそうになった時にうまく調整出来たりしたこともあ

ります。下水道展に出展するための部材を頼まれたこともあります。業界は申し上げられませんが、ご本人は絶対、口添えしたとは仰いませんが、大きな物件の受注に助けていただいたようなこともあります。皆さん、ここに集まると自社の事がある程度、度外視するようなフランクな雰囲気を感じていました。

田中●定例的な会社内での仕事の中で、小委員会は外部の人との接触により違う空気を取り入れるカンフル剤ともなり、新しい知識にも触れられる貴重な会議でした。

役立ったことといえば、会議の中でのレジメをどんなに遅くなった2次会でもあくる日には即報告する等、即効性報告の習慣がついたことでしょうか。直属の上司からも「田中さん、JSTTの委員会に行かれると何か楽しそうですね」と言われたものです。

川合●私の場合は、編集小委員会などJSTTとの繋がりにより人生が変わったといっても過言ではありません。

当時は、社内では、それまでの通信事業が主体で、それに加え、公共事業への業務拡大や自社や協力企業との工法開発として、コスト縮減、超大口径、パイプルーフなど工法の開発・支援など非開削技術の施工に力を注いでいました。また、個人的には、工事の企画設計の部署に在籍していたことから、活動を通じて知りえた情報で企画提案書の内容を充実化できたこと、委員の特権により参考記事を優先掲載（申し訳ありません！）できたことは普及の一助となれたと思っています。

とくに、JSTTの活動を通じ設計会社の方とも知り合うことができました。推進工事では無かったのですが、現場での大トラブル発生に対し、設計の立場からの助言をいただき、対策方法を企画し見事に解決することができました。その他には、本日田中さんがいらっしゃいますが、東京ガスさんの効率的な埋め戻し工法などを自社現場に展開できたことなど、活動を通じ得られた成果は多くあります。

また、個人的には、No-Dig国際大会での九州大学島田先生との出会いによって、最終的には博士を取得する機会を得られたことが挙げられます。それまでの人生では考えられない経験ができました。

そんな異業種交流の大切さを教えていただいた編集小委員会活動ですが、現在でも働く環境は違うものの、いまでも同様の交流会へ積極的に参加し、職務へ

の貢献と自身のスキルアップにつなげればと思っています。

今川●私の方は、やはり下水の業界がメインですので、下水業界の中では容易に投稿依頼が出来ても、やはり電力、通信はじめとする他業界においては、それまで全くと言って良い程、接触する機会はなかったもので、原稿依頼するにも何から手を付ければいいのか？の状態だったのですが、事務局の方々含め、はるかに経験豊富な委員の方々から差し伸べられる多くの手に導かれることで、“案ずるより産むが易し。助かった。”と思った事を覚えています。

周りからすると何をそんなに困ってるの？というように見えたかもしれません。なにより暖かい環境の中で色々な経験を積ませて頂いた集まりでした。

石川●次に、皆さんがお楽しみにされた“アフター会”と“アウター会”について、思い出話や面白いエピソードなどをご披露願いたいと思います。私も両方の会には積極的に参加させていただいたと思います。もしかしたら“ほぼ皆勤賞”だったかもしれません。皆さんは、本チャンの会議よりも、両会への参加時の方が楽しく、生き活きとしていたようですが、如何でしたか。

田中●飲みネーションと申しますが、会議後の毎回の飲み会、中でも藤沢市でのシールド工事の現場見学会後の飲み会は良かったですね。二人だけになった同委員の塩見さんに「ちょっと早いですけど、どうですか、一杯行きますか？」と声をかけ、駅前の暖簾がかかっている小料理屋に寄った時の一コマが印象に残っています。夏の日差しが強く照りつける真昼間（16時頃）の時間に暖簾がかかっている、本当にやっているのかな？と疑い深くこっそり覗いてみると、そこは全くの別世界、安らぎの小料理屋の世界。「焼酎は“芋”ですね」と共鳴しつつコップのピッチは上がり、お互いの気心を知り得る貴重なひと時でした。

川合●皆さま方と顔を合わせている中で思い浮かぶアフターファイブは3つありますね。

一つ目は、やはり“飲み会”。毎回のように会議の後立ち寄って焼き鳥川越屋。当時、川越屋は決して綺麗とは言えない焼き鳥で、居間を兼ねたような奥座敷など下町風情のあるお店（勿論焼き鳥も最高）であったと記憶しています。宴席締めとしての“ひきずりうどん”は最高でした。現在は建替え綺麗になっているようですが、改築後の川越屋を訪れる機会が無いのが

残念です。

二つ目は、“社会科見学”。協会が溜池山王から門前仲町へ事務所を移転したことを期に、七福神めぐりと日本の地図の基礎を作った伊能忠敬を辿ってなど周辺散策により見地を深めるようなレクリエーションもありました。そのような中、伊能忠敬とともに江戸後期の探検家とされている間宮林蔵の生家が、私の自宅から車で3分程度の所にあることを知り訪れたものです。編集小委員会では、見学会などのレクリエーションを含め、単に社会科見学ではなく、きちんと機関誌の話題として取り扱っているところが肝要であったと思います。

三つ目は“ゴルフ”ですね。皆様方と話題が競合するかもしれませんが、ハネージュカップでの親睦です。ゴルフはお酒以上に直ぐに打ち解けますね。10年以上も続いているハネージュカップですが、実は幻の第0回の存在があったこと覚えていますか。2005年2月25日当日は雪でゴルフが中止となったのですが、すでに意気投合していたことから急遽予定を変更して集まった皆様と水戸偕楽園へ行くことになりました。当時の写真を持ってきました。皆さん若いですね。

このように、すぐ仲間となってしまう魅力が当時の小委員会にはありましたね。そんな雰囲気が誌面においてもスムーズな編集作業に活かされていたのだと思います。

アフターファイブの話が一番長くなってしまい申し訳ありません。個人的には、機関誌の編集業務に携わ

り、話題や構成など雑誌作りは大変でしたが、参加することで多くの方と知り合いになれたことや知識の習得など、自社内では決して経験できない機会を与えていただいたことに感謝しています。

今川 ●「たまにしか出席しないのに、たまに来ると言いたい事しゃべっていくね！」と委員会終了後のアフター会（意見交換会）の席で、塩見さんからお叱りを受けたことを、未だに覚えております。好き勝手に話していたのも、まだ若造だったからこそ。広い心でお許し頂いていただろうかと、今思い返しても赤面の至りです。缶ビール片手に自家製燻製を齧りながらの中身の濃い意見交換会が繰り広げられていました。

皆さんは意見交換会后、連れ立ってどこかに行かれるようでしたが、私の方は「こんな時間から会社戻るの？かわいそうに...」と大して心もこもってない軽いタッチで送り出され、会社に戻って通常業務していたような記憶が残っています。

一方、“野外活動”の方はあまりご一緒出来ていません。“^{ハネージュ}Hanage”の集まりも、毎回ご案内頂くのですが、御無礼ばかりで1回しか参加できていません。が、唯一の出走で準優勝！

スコアは、1**（とてもお見せ出来ません!!）でしたが、ハンデを最大限に活用しての準優勝。心の中では「優勝しないというところがお上品。これなら次回幹事も廻ってこないし、しめしめ…」と、柏駅近くの居酒屋で焼き鳥ほおばりながら、ほくそえんでいたのを告白しておきます。





幻の第1回ハネージュカップ ミス梅まつりを交え記念撮影
皆さん若いですね



門仲散策より 明治11年東京発の鉄橋“八幡橋”
(日本最古に属する鉄橋として有名)

塩見●本当に楽しかったですね。なかなかあの雰囲気
をだせる飲み会はないですよ。それが昼は全く違う会
社で、違う仕事をしている委員たちが一堂に会するわ
けですから楽しいし勉強にもなりました。委員の方々
の素の性格が垣間見え、普段、近寄りがたい人も本当
はおちゃめな人なんだ、と分かったりして。当時は溜
池山王に協会がありましたから、ついつい夜の街へ繰
り出したりしましたね。小委員会のゴルフコンペのこ
とを皆さん懐かしんでおられますが、私は実質ここで
ゴルフを始めたようなものでした。もっとも私と和田
さんは飲みに来ているようなゴルフでしたけど。

石川●最後に、これまでの皆さんの体験を踏まえ、
JSTT 機関誌 No-Dig Today の有用性や使命、読者か
ら見た役立て方や面白さなど、今後の期待も込めて
エールを頂きたいと思います。

田中●機関誌は土木技術者の非開削技術全般の広告塔
でもあり、良き情報源でもあることから、年間を通し
て購読されることをお勧めします。それに加えて石川
編集委員長らの誌末の非開削技術と関連する時期を捉え
た「時事放談？」も見逃せません。お勧め致します。

川合●通常業務が忙しい中、編集小委員は、その活動
にある程度の時間を費やす必要があります。先ほどの
繰り返しにはなってしまいますが、委員会を通じての
情報取得やネットワーク拡大は計り知れないものもあ
ります。本誌は、小委員会発足後、これまでの会員相
互の技術情報交換の場から一歩外に視野を広げ、発注
機関や道路管理者、社会に非開削技術が目に残るよ
うな誌面を目標として製作に取り組んできました。現

在の編集小委員の皆様方におかれては、ぜひ No-Dig
Today を非開削技術に関する情報源として読者層を広
げ、今後も楽しめる機関誌の発刊をお願いしたいと思
います。

No-Dig Today は専門誌ですが、本屋さんの店頭に
並ぶ日がくるようなことを夢見ています。本日は座
談会に参加させていただきありがとうございました。
100号の発行を楽しみにお待ちしております。

今川●通常の業務とは異なり、JSTT の委員という立
ち位置があるからこそ、他業界の方々と情報交換の
チャンスも生まれてきます。そういう動きをこれから
も続けていくことが、新しい技術が生まれる素地に
なっていくのではと感じています。これからも JSTT
編集企画小委員会の風土を絶やすことなく続けて行っ
て欲しいなと思います。

塩見●非開削による管路埋設、維持補修、調査・探査
を業界の垣根なく紹介している点は、技術の進展を見
ていくうえで実務者には有用だと思います。当時か
らの小委員全員の思いでしたが、もっと道路管理者が非
開削技術に興味を持ってほしいと思います。官の技術
者にとって、採用したい工法がきっと見つかるはずだ
と思います。

石川●本日は、皆さんから大変貴重なかつ愉快なお話
を多く頂きました。皆さん方には、これからもこの
No-Dig Today の良きサポーターとしてご支援頂きた
いことをお願いして、この座談会を締めたいと思いま
す。本日は長時間にわたりありがとうございました。

さあ、久しぶりにアフター会に参りましょうか。